

これによつてミリヴァリスは文壇での新人としての地位をえたが、のちアテネで再び出版され（1930年）、大きい成功をおさめた。その後、彼はアテネにおいて種々の新聞の主筆、論説委員、文芸寄稿家として活躍、1958年にはアテネ・アカデミアの会員に選ばれ、ギリシア文芸協会の会長にもなつた。彼の小説には「墓場でいのち」の姉妹篇ともいふべき「金色の眼の女教師」（1933）のほか、「大地の歌」（1937）、「ヴァシリス・アルヴァニティス」（1943～1944）「タ・バガナー」（1945）、「パン」（1946）、「聖女ゴルゴナ」（1953）さらに少年小説「アルゴナウテース」（1936, 1943）などがある。「墓場でいのち」「聖女アルゴナ」などは諸外国語にも訳され、好評を博した。また短篇小説集には「赤い物語り」（1915）、「短篇集」（1928）、「緑の本」（1935）、「青い本」（1939）、「赤い本」（1953）、「さくらんぼ色の本」（1959）など一連の色の名を冠した作品集があり、上に訳された「老人」は「緑の本」の中の一小品である。（J.L.O.）

教育実習の思い出

香 川 ミチ子

秋も深まりゆく頃、私は久方振りに母校の土を踏みしました。第一週目は小学校でした。二年生を受持つたのですが、割振りの関係で初日の一時間目の国語を、まず、やつてみてくれということになり、とんだことになつたと思ひました。

小学校の低学年といへば、使用出来る語彙数も相当限られてくるけれどもと思案していると、「貴女は言語学専攻だから、その知識も旨く取り入れて……」と担当教官に発破をかけられて一層当惑しました。

指導案の書き方も、初めてで要領は、つかめないし、教生として第一号の授業だから、他の人の参考には出来ないしで、その前夜は、三時半まで寝られず、おまけに、明け方近くには、自分が必死になつて授業をしている夢まで見ました。その朝は、八時四十分始業のところを八時二十分頃に学校へ行き、腕時計の針を気にしながら、四十分間の授業を教案通りに終えた時は、本当に、ほつとしました。放課後の批評会の時、“始めてにしては”という条件付きでしたが、好評でしたので、“成せば成る”とはよく言つたものだと思ひ満足した体でした。

さて、その担当授業の直後、先輩から話には聞いていたのですが、女の子達（??男の子達は来ませんでした）が、数人寄つて来て、あつちに行こう、こつちに行こう、と言つて、手を離さないのです。私も、つい嬉しくなつて、皆と一緒に外に出て、ドッジボールをして遊びました。童心に帰つて精一杯遊びました。私の投げたボールが当たると「カツコイイ!」という歓声が上がりました。

二回目の授業もスムーズに終り、児童の顔と名前が、そろそろ一致しだしたと思つてみると、もう中・高担当の二週間目がやつて来ました。中・高では小学校程、生徒との連帯感がありませんでした。

中学校二年生を一回、高校一年生を二回担当したのですが、自分では、解つている積りでいても、その知識が、どんなに曖昧なものであつたか、教えるという立場に立つて、初めて解つたような気がします。

中学校の場合は、oral exercise が主なので、自分の発音は果たして、これで良いのだろうか、生徒に与える英語の発問がスムーズに出てくるだろうかと初中終気になりました。高校の場合は、「ここは間違っています。」と声を大にして言おうとすると、妙に自信のなくなることが度々あり、“知つてゐる”ことと“人に教えることが出来る”こととの間に横たわるギャップを、しみじみと感じました。

総じて言つて、教育実習に行つて良かったと思うのは、立派な教師になることの難しさ、その責任の重さといったものが、多少なりとも、感じ取ることが出来たということです。

— 10月23日 —

修 士 論 文 題 目

倉 田 馨 円 「法華經（散文）に於ける動詞の位置について」

林 勲 「On the Jakobsonian Distinctive Feature Theory」

（なお、いずれも後日くわしい論文として発表予定）

『フランス語の動詞組織について』

— 16世紀から17世紀の代名動詞の推移を中心に —

まえがき 世に歴史は繰り返すと言う。確かに歴史は弛緩と緊張とを繰り返して来た。その中で人間は太古から現代まで着実に発展して来た。歴史を作つている一要素としての言語の歴史も同様である。以下16世紀、17世紀の、それも代名動詞という狭い範囲ではあるが、2つの時代の代名動詞の用法を比較することによつて、それがどのように変化し